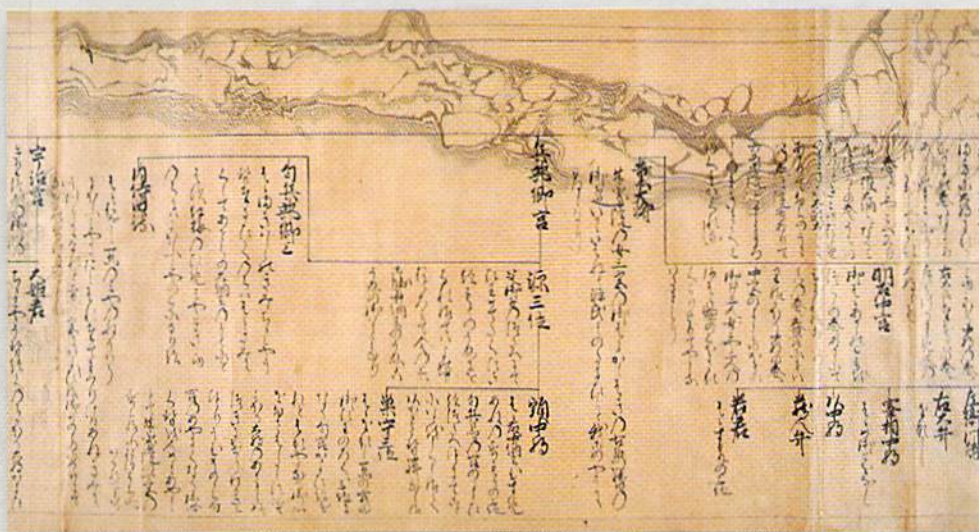


大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

# 国文研ニュース

No.14

WINTER 2008



『光源氏系図』

## 目次

### ●メッセージ

- 源氏物語の文化力を示した千年紀 神野藤昭夫 ..... 1  
 「源氏物語 千年のかがやき」展の片隅に 横井孝 ..... 2

### ●研究ノート

- 若紫巻「ゆくへ」考 金光桂子 ..... 3  
 中世源氏の展開 ―〈続き〉を書くということ― 小川陽子 ..... 6  
 今様のもう一つの歴史 沖本幸子 ..... 9  
 怨霊後醍醐の苦患 北村昌幸 ..... 10

### ●トピックス

- 第32回国際日本文学研究集会「物語の過去と未来」..... 11  
 機構シンポジウム「源氏物語の魅力」..... 11  
 源氏物語一千年紀 記念切手記念講演会 ..... 12  
 連続講演「千年紀の源氏物語」..... 12  
 特別展「源氏物語 千年のかがやき」..... 13  
 新収資料紹介 ..... 13  
 中間報告論文研究発表会 ..... 14



## 源氏物語の文化力を示した千年紀



神野藤 昭夫  
(跡見学園女子大学教授)

源氏物語千年紀は、おおかたの予想をはるかに越えたスケールで、空前の源氏物語ブームを巻き起こした年として、長く歴史に記憶されることになるだろう。

千年紀が担った意義を振り返るには、源氏展、学会の特別企画、出版、放送、種々のイベントなど諸方面にわたる膨大な情報の整理と冷静な分析が求められよう。私の感想などは、文字どおりの管見にすぎないが、二十世紀の源氏学が二十一世紀の源氏学へと転換を画した年としても振り返られることになるのではないか。

私の印象を焦点化すれば、源氏絵に代表される源氏文化の広がり、さまざまな写本群の存在とその再評価、それに海外における源氏物語の受容と研究交流の三点である。

二十世紀後半の源氏学の最大の関心は、作品あるいはテキストとしての源氏物語をどう読むかということにあった。現代語訳をともなった諸注釈の充実が、源氏物語研究の質と量をいっきに高めてくれたといつてよい。源氏物語という世界のパラダイムをいかに捉えるかという議論から精細な読みへと、研究は飛躍的な深化を遂げるようになった。

それは、まさに活字テキストとの対話あるいは格闘が生み出したものである。しかし、読みの深化は、その精緻さゆえに、しだいに息苦しい閉塞感をもたらすことにもなってきた。文学としての源氏物語は書かれたテキスト以外にありえようがなく、源氏絵の類などは、源氏享受が生み出した二次的産物にすぎないと傲慢にも思い込んで、テキスト至上主義の閉鎖的な源氏ギルド社会に陥っていた感もある。

しかしながら、千年紀を画して各地で開催された源氏展で、溢れ出るように展示された源氏絵の氾濫に圧倒されたのは、私だけではあるまい。密室における活字テキストとの対話とは異なる、源氏物語の文化力が生み出したもうひとつの世界が広汎にひろがっていることを痛感させられたといってもよい。それだけに、一瞬の豪華な堪能ののちに、夢のように私たちの目の前から消えてしまうのは惜しいといふほかない。幸い『源氏物語 千年のかがやき』(国文学研究資料館特別展示図録)が、『源氏物語団扇画帖』をすべて解説つきで収めたのは、今後の研究に資する大きな恵みであったといえよう。

また各地の展示では、今日流布する源氏物語の多くが底本として採用する大島本を初め、多くの貴重な写本類を目の当たりにすることができたのも、伝本に対する関心を惹起することに繋がった。新聞紙上を賑わせ、中古文学会が伊井春樹館長に紹介のための講演を求めた大沢本などは、千年紀の高まりこそがその出現を促し、一般の人たちの耳目までかきたてる話題となったといえよう。いったい二十世紀後半型の研究者の多くは、『源氏物語大成』で本文研究はひとまず一段落したものとみて、大島本に依拠して安住してきた。ところが、近年、地味で、労の多い諸本研究を手がける少数の研究者たちが、大島本の信頼性に警鐘を鳴らし、さらに別本のなかに、再評価すべき本文があることの意義を喚起してきた鳴動が、源氏物語テキストの地盤を揺るがすにいたったわけで、千年紀がテキスト研究の大きな転機になることはまちが

いない。

さらに、源氏物語をめぐる国際研究集会が、内外の研究者を集め、数多く開かれた国際性の意義もまた大きい。今や世界で二十指余りの言語に翻訳され、海外の多くの研究者たちが源氏物語を論ずる時代がやってきて、源氏物語が世界文学となったことを実感させられた年でもあった。フランスでは、昨年出版された四五四・九八ユーロもする豪華挿画版『源氏物語』三五〇〇部がわずか三ヶ月で完売。現在、普及版が店頭にならんと聞く。また、この十一月には、田辺聖子の『新源氏物語』の翻訳が、上海訳文出版社から出たばかりである。まことに慶賀にたえない情報だが、その一方、喜んでばかりいられない状況があることが明らかになってきている。源氏物語は、高く評価される一方、受容層の広がりとともに、たんなる好色文学として誤解に晒されているとも聞く。世界が源氏物語を再発見しなおす時代が到来した千年紀であったともいえよう。

私たちの源氏物語研究は、細部に踞るだけではすまない。神は細部に宿るから、細部へのこだわり抜きに学の信頼性はいえませんが、私たちの〈学〉が他者への発信と交流とを抜きにしては意味をもちえないこというまでもない。〈学〉には幅広い知の共同性と倦まず積み上げ伝達する歴史の継承性が必要であることを、源氏物語の文化力が教えたくれたところに、源氏物語千年紀の大きな意義があったと感じている。



## 「源氏物語 千年のかがやき」展の片隅に



横井 孝  
(実践女子大学教授)

資料館として空前の規模でおこなわれた標記の展示会は約1ヶ月の会期を無事終え、そして「源氏物語千年紀」もようやく終息を迎えた。余熱さめやらぬ現在、2008年という一年のバースペクティブを総括するにはまだ時間が必要だろう。しかしこの「千年紀景気」がもたらした成果は、ひいき目かもしれないが、それなりに評価できるのではないか。「大沢本」の再発見、さらに「角屋本」「飯島本」「勝安芳旧蔵本」という矢継ぎ早の発掘、紹介などはその機運に乗じて公表されたものであったし、「源氏物語」のいわゆる別本が脚光を浴びた年でもあった。

雑多な諸本群と扱われていた別本が再評価・再検討の対象とされはじめたのは阿部秋生「『源氏物語』別本の本文」(『文学』1984年10月～1985年2月)あたりからだったが、平成に入ってからというもの、本文研究といえば別本を中心に展開するのが相場となっている。大島本を窓口として青表紙本の輪郭がかなり鮮明になり、その可能性の枠も見えてきたらしい。となれば別本に新天地を期待するのは当然なのかもしれない。別本発見のマスコミ報道は、本文研究の現状を正直に反映しているのであろう。

しかし、大正・昭和の交にも似たような「ブーム」があったのではなかろうか。大正末年、それまで湮滅したとされて待望久しかった河内本が相次いで発見された時期のことである。大正10年(1921)に平瀬本、同14年(1925)金子元臣所蔵本が公表され、昭和に入っても9年(1934)尾州家本の影印が公刊され、金子「新解」(1925年)、山岸徳平「尾州家本開題」(1935

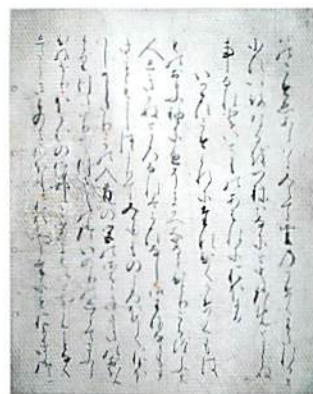
年)、吉沢義則「対校新釈」(1937-1940年)、山脇毅「文献学的研究」(1944年)などの河内本研究が矢継ぎ早に上梓された。『源氏物語大成』の前身で結局は日の目を見なかった『校本源氏物語』が、当初は河内本を主底本としていたことはよく知られるところで、昭和7年(1932)11月に東京帝国大学国文学研究室主催の展覧で「校本源氏物語底本 河内本(禁裡御本転写)」が校本の原稿とともに展示された(同展観書目)。

ところが、池田亀鑑が大島本に遭遇し、それを「校異源氏」(1942年)、『大成』(1953-56年)の底本に用いたところから事態は一変した。大島本が定家本に肉迫する本文と称揚される一方、河内本は読みやすく校訂した本文とされて一挙にその評価が冷却した。その後、加藤洋介の一連の仕事以外とりあげる論者もほとんどなく、大島本が研究世界を席卷したことは周知のとおり。昨今の別本への関心は、果たして過去の「河内本ブーム」を他山の石とすることができるのだろうか。もう一度河内本を見直すことは無意味なことだろうか。

先の「千年のかがやき」展で、陽明文庫本・中山本・大島本など重文、あるいは重文級の諸本が並ぶ片隅に、冊子の体裁ではないため一般の目をひかぬながらも、実は重要なものが出陳されていたのだ。古筆の一群がそれである。特に伝承筆者を為家とする薄雲巻切は、河内本本文で尾州家本と同様な大型本の面影を宿す大四半切であり(37.7×21.1cm)、尾州家本と同じく鎌倉中期写と目されるものであった。

尾州家本は正嘉2年(1258)の北条実時の奥書を有し、源親行本を書写したという格段に古い本とされてきた。当該の断簡は尾州家本の本文との親近性はもとより、書写年代も近接すると目されている。しかし近年、奥書の実時自筆に不審が抱かれ、尾州家本は正嘉2年本のさらなる写ではないかと疑われるようになった。現に尾州家本本文は様々な書き入れ等の修正を経て河内本になりえているという事実がある。それに比して、当該断簡は修正の痕もほとんどない、典型的な河内本本文である。尾州家本と断簡との間の先後の問題と絡め、尾州家本本文の成立状況の問題を解く鍵を断簡が有しているのかもしれない。

伝為家筆の薄雲巻切は、資料館の他にも鶴見大学・田中登氏・池田和臣氏が所蔵しているが、さらに久下裕利氏も蔵すること、また、私が勤務する実践女子大学文芸資料研究所にも架蔵していることをここに報告しておこう。別本と並行して河内本もまた同様に読まれた鎌倉期は、「源氏物語」伝流史が大きく展開する時期である。断簡の情報をひろく収集すれば、当該薄雲巻の様相と周辺状況がかなり鮮明になるのではないだろうかという、ささやかな夢を捨てきれない。その実現性はともかく、「千年のかがやき」展の成果は、河内本の研究の将来にとっても小さいものではなかったと思うのである。



『源氏物語』断簡(当館蔵)



## 若紫卷「ゆくへ」考



金光 桂子  
(京都大学准教授)

『源氏物語』若紫巻、北山のある僧坊で美しい少女を垣間見た光源氏は、その少女について情報を引き出すべく、主の僧都に問いかける。次に挙げるのは、二人の対話場面の後半の一節である(引用は新潮日本古典集成による)。

「いとあはれにものしたまふことかな。それは、とどめたまふかたみもなきか」と、をさなかりつる行方の、なほたしかに知らまほしくて、問ひたまへば、…

このうち「をさなかりつる行方」という部分の解釈が、注釈書によって異なっている。比較的近年のものによれば、おおよそ次の三つに分かれる。

- A 少女の将来(日本古典文学大系、新編日本古典文学全集)
- B 少女の素姓(玉上琢彌『源氏物語評釈』、新潮日本古典集成)
- C 母親の死後、少女がどうなったか(山崎良幸・和田明美『源氏物語注釈』)

「をさなかりつる」の下に「人の」のような言葉を補い、「あの幼かった少女の」とする点ではみな一致する。問題は「行方(ゆくへ)」である。より古い注釈書(吉澤義則『対校源氏物語新釈』、島津久基『源氏物語講話』等)を見ると、「種姓」「身元」など、概ねBの意に取っているようである。古典大系が「「ゆくへ」は、「今後の身のふり方(身の上)」についてである。素姓とか身元ではない」と注記して以来、様相が変わってきたらしい。

しかし、この場面の文脈から考えるとどうだろうか。そもそも源氏は、少女について「何人ならむ」という疑問を抱き、「ここにものしたまふは誰にか」と、さりげなく僧都に問いかけたのだった。そして、僧都の妹の尼君が身を寄せていること、その尼君の娘にはかつて兵部卿宮が通っ

ていたが、今は既に亡き人であることまで聞き出した。そこで「さらばその子なりけり」、藤壺の兄である兵部卿宮の子だから、あの少女は藤壺に似ているのだろうかと思ひ当たり、ますます心ひかれ、我が手元で育ててみたいと思ひはじめたところで、先の引用文に続く。源氏は少女の「行方」を「なほたしかに」知りたくて、さらに問いを重ねたという。この流れからすれば、「なほたしかに」とは、「さらばその子なりけり」と思ひ合わせたことを受けているとしか考えられない。

いうまでもないことながら、後に紫の上と呼ばれるこの幼い少女に源氏が目を奪われ、果ては誘拐まがいの行為に及ぶほど執着したのは、単にその愛らしさゆえではなく、何より藤壺の面影を宿していたからにほかならない。もともとあの少女は一体何者なのかと疑っていた源氏が、ここで確かめたいことといえば、本当に兵部卿宮の子なのか、藤壺の縁続きなのか、ということ以外にないのではないかとすれば、やはりこの「行方」は「素姓」という意味であってほしいところであり、AやCのような理解では不自然の感を否めないのである。

古典大系が「素姓とか身元ではない」と断じた理由は明らかでない。ただ、「ゆくへ」という語が果たして「素姓」という意味を持ちうるのかという疑問は残るだろう。手近な辞書で「ゆくへ」を引くと、一つ目に「行き先」、二つ目に「将来」という意味を挙げるのみのものも少なくない。しかし、「ゆくへも知らず」という形なら、『日本国語大辞典』等に「どこの誰かわからない」「素姓もわからない」という意味を載せる。ただし用例はすべて中世以降のものである。比較的早い用例として、高倉院崩御(1181年)前後の模様を源通親が記録した『高倉院升遐記』(新編日本古典文学大系)から挙げておく。

影のやうに立ち添ひし人々も留まりたるもなく、行方も知らぬ三昧僧ばかりぞさぶらひて、ありしかはるることのみ思ひ続けられて、

ゆくへなき知らぬ御法の師なれども君ゆくへにこそ道びかれけれ

和歌の初句にあるように、「ゆくへなし」

という形でも同じ意味になる。「ゆくへも知らず」「ゆくへなし」とともに、このような意味での用例は、謡曲・御伽草子などにも散見する。

「ゆくへ」が単独で「素姓」の意を表すことも、中世にはさほど珍しくない。たとえば中世王朝物語の『我身にたどる姫君』(鎌倉時代物語集成)では、不義の子として生まれ両親を知らずに育った姫君が、「いかなりし我身の行衛ぞ」と、自らの素姓を自問している。『太平記』(日本古典文学大系)にも、

彼ノ女房ノ行末ヲ委尋テ候ヘバ、今出河右大臣公顯ノ女ニテ候ナルヲ、徳大寺左大将ニ申名乍、未皇太后宮ノ御匣ニテ候ナル。(巻十八・一宮御息所事)

という例がある(「行末」は仮名表記の諸本によると「ゆくへ」)。もとより、「ゆくへ」という語全体の用例数から見れば極めてわずかではあるが、中世には確かに「素姓」の意で用いられることがあったのである。

しかし、用例が中世以降に限られるとなると、ただちに『源氏物語』に適用するのは躊躇される。若紫巻のこの箇所以外に、『源氏物語』には「ゆくへ」の語が35例見られるが、「素姓」の意に取れるようなものは一つもない。同時期ないし先行する作品にも見つけられなかった。だが、平安後期の物語には若干例があるようなのである。

その一つは『狭衣物語』(新編日本古典文学全集)の例。

確かに知らせたまはぬをも、とやかうやとも、あながちに尋ね恨みず。また、我



『源氏物語団扇画帖』若紫(当館蔵)



が身の行方もうちとけ言はぬものから、心の中やいかあらん、見るほどには、ただ同じ御心なるやうに、うらなくうちなびき、心地寄せたるさまも、…(巻一)

狭衣が忍んで通っていた飛鳥井の女君について、「我が身の行方」を「うちとけ」で語ることはないものの、その態度はすっかりうち解け靡いているように見えたという。この「我が身の行方」の部分に、諸注ほとんどが「自分の将来」という類の訳をつけている。しかし、およそ物語の姫君というもの、時々通ってくる男君に向かって、多少うち解けたところで、自らの将来について語ったりするものだろうか。ましてこの女君は、とりわけ内気な性格の人なのである。「将来」について語ることを、うち解けたかどうかの指標として持ち出すというのは、些かピントが外れているように思われる。むしろここは、狭衣と飛鳥井の女君の恋物語に、光源氏と夕顔の〈身分違いの名乗らぬ恋〉の影響が顕著であること、狭衣が自分の名を「確かに知らせたまはぬ」と対としての「我が身の行方もうちとけ言はぬ」であろうこと、などを考え合わせれば、「行方」を「素姓」の意で解釈するのが適当かと思う。

もう一例は『浜松中納言物語』(新編日本古典文学全集)より。吉野の姫君の失踪を嘆く中納言の思惟である。

聞きつけては、またいかなる人のもとにおはすとも、もとより離れぬゆかり、われのみこそ。知るべき人などたづね寄らむも、吉野山の聖よりほかは、この人の御ゆくへ知る人なければ、疑ひおきて思ふ人、たれかはあらむ。(巻五)

この前後、やや文意のわかりにくいところで、諸注の解釈もまちまちである。簡単に背景を説明しておくと、吉野の姫君は帥宮という人物の娘であるが、都人に知られることなく吉野の山奥で母の尼君に育てられた。引用文中の「吉野山の聖」とは、尼君が帰依していた聖のこと。中納言は唐後の依頼により尼君(唐後の母でもある)を訪ね、母娘の面倒を見るようになる。そして尼君の死後、姫君を京に迎え取り、まだ契りは結ばぬものの大切に世話をしていたのだが、その姫君がある日忽然と姿を消したのであった。ちな

みに、この吉野の姫君は、唐后ゆかりの人(異父妹)として中納言の前に現れるという点で、『源氏物語』の紫の上に倣って造型された人物である。

さて、問題の「この人の御ゆくへ」だが、「この人」が吉野の姫君を指すのは間違いない。目下その姫君は行方不明になっており、聖とて居場所は知らないはずだから、「御ゆくへ」を「行き先」と取ることはできない。かといって「将来」の意だとしても、「姫君の将来を知る人がいないから、誰も疑わないだろう」とはどういうことなのか、釈然としない。しかし、「素姓」という意味をあてるならば、「姫君が誰のところによいとも、私こそ姫君のお世話をすべき者だと名乗り出たところで、吉野山の聖以外に姫君の素姓を知っている人はいないのだから、私が縁者であることを疑う者はいないだろう」というような解釈で、スムーズに理解できると思うのである。現にこの後、姫君が式部卿宮のもとにいと知った中納言は、事実反して、姫君を亡父の子、つまり自分の異母妹だと言いつくろうことになる。

もちろん『狭衣物語』『浜松中納言物語』ともに、『源氏物語』より数十年は下る成立の作品である。しかし、これまで知られていた中世の用例よりはずっと近い、同じ平安朝の物語に、「素姓」の意に取るべきと思われる「ゆくへ」の用例があることは、大いに参考にすべきであろう。若紫巻の当該例にも、文脈上最も自然な「素姓」の意を採用してよいのではなからうか。

それにしても、なぜ「ゆくへ」が「素姓」の意になるのかということは、考えておかねばなるまい。Bの解釈を取る古典集成は、「ゆくへ」という語自体に「素姓」の意を認めていたのではなく、「少女についての話の中での行方(結着)の意」から「素姓」と意識したらしい。これは、『源氏物語玉の小櫛』に「ゆくへは、僧都の物がたりの末也」とあるのと同様の考え方だが、若紫巻のこの場面に依存した理解であり、『狭衣物語』等の例に及ぼせないという難点がある。

また、『時代別国語大辞典 室町時代編』は、先述の『太平記』の例などを挙げ、「ゆくへ」の三つ目の意味として「そ

ものの今に到る経歴」と記している(『太平記』の「行末」を「ゆくすゑ」と読み、その項に「経歴」の意を載せる辞書もある)。実は、若紫巻の「ゆくへ」について「将来」説を否定した先行研究に、北山谿太「源語・疑義三つ一語らふ・行くへ・大般若油近くて一」(『国文学』昭和35年11月号)があり、そこでも、

「幼かりつる人」の生い立ちを行路にたとえて、誰と誰との間に生まれ、そしてこいうふう歩いて(生い立ッテ)行ったという、今日までの行路、即ち、過去の経歴の意

と説明されていた。過去(生まれた時)を基点とした「ゆく」だというのである。過去に基点を置くことが可能なのかどうかはよくわからないのだが、若紫巻の当該例をはじめ本稿で挙げた実際の用例を見るに、どのような人生を歩んできたかという「経歴」よりは、やはりどういう生まれであるかとか、いかなる身分の者であるかといったことを問題にしているように思う。確かに『太平記』の例は、徳大寺左大将との婚約について述べるなど、「経歴」に近いところもあるが、これは、誰とも知らぬ女性を見そめた一宮のために、特に「委調<sup>ツカサツケ</sup>」調べて報告したものであるから、例外的にそうした情報も付け加わっているであろう。

したがって、「ゆくへ」を「経歴」の意とする考え方にも首肯しかねるところがある。むしろ、「ゆくへも知らず」に「どこの誰かわからない」という訳があてられていたように、「帰ってゆくところ」というぐらいの意味から、「素姓」を意味するようになるのではなからうか。参考になるのは次の『隆信集』(新編国歌大観)の例である。

月あかりし夜、麗景殿の広廂などたずみありきしに、宣耀殿の反橋に、女二人たちたりしを、すぐるさまにてひきとどめしに、いま一人はこげしあとに、この女、いとわりなう思へりしかども、とがむべき人なかりしかば、ゆるさずなりにしを、いとあはれにおぼえて、ゆくへをとへど、誰ともあらはさざりしかば

心をば雲井の月にとめながらゆくへもしらずあくがれよとや(618)  
宮中で偶然出逢った女に「ゆくへ」を

尋ねると、女はどこの誰であるとも明かさなかったというのである。この場合の「ゆくへ」は、ひとまず「どこへ行くのか」という問いだったとしても、それは取りも直さず「どこへ帰るのか」ということであって、結局素姓や身分を尋ねているのと同じことになるのだろう。なお、『隆信集』のこの歌の詠まれた状況は、『源氏物語』花宴巻、光源氏と朧月夜の出逢いの場面を髣髴とさせる。源氏は、名を聞かぬままに別れた女性を有明の月にたとえ、「世に知らぬこちこそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて」と、その「ゆくへ」がわからないと詠む一方で、彼女の素姓（弘徽殿女御の妹のうち六の君であること）を突き止めようとしていた。源氏の歌における「（月の）ゆくへ」は「行き先」以外の意味ではあり得ないけれども、実質的には「（女が）帰っていったところ」を意味しており、それはまた「素姓」とほぼ同義なのである。「行き先」の意と「素姓」の意の連続性を示す例とはいえるのではなかろうか。

「素姓」の意の発生について、これ以上の追究は稿者の力の及ばぬところなので控えるが、若紫巻の「ゆくへ」はやはり「素姓」の意に取るべきと考える。



『源氏物語団扇画帖』若紫(2)(当館蔵)



## 中世源氏の展開 —〈続き〉を書くということ—



小川陽子  
(松江工業高等専門学校助教)

千年にわたって『源氏物語』が読み継がれてきた間には、さまざまな副産物が生み出された。和歌における『源氏』取り、連歌の付合、あるいは文学を離れて源氏絵や源氏香、等々。もちろん『源氏』と同じ作り物語というジャンルにおいても、その影響の大きさは改めて申すまでもない。

ところが実際に『源氏』以後の作り物語の数々をながめてみると、意外にも、『源氏』の人・時間・空間をそのままに引き継いで物語を作り出すという試みは、ほとんど行われていない。中世に限ってみれば、『山路の露』『雲隠六帖』そしていわゆる『別本八重葎』の三作品が知られるにすぎないのである<sup>\*)</sup>。このうち『別本八重葎』は、須磨明石から帰京した光源氏を描いた「もう一つの蓬生巻」<sup>\*)</sup>であり、『源氏』にすでに描かれてある人・時間・空間について、別の可能性を探った作品としてある。とすると、『源氏』に登場した人々のその後、すなわち〈続き〉を作り出したのは、現在知られるかぎり、『山路の露』と『雲隠六帖』にに限られるわけである。

とはいえ、『山路の露』と『雲隠六帖』では、その内容も表現も大きく異なる。薫と浮舟のその後を一卷で描いた『山路の露』と、光源氏の死、薫・浮舟・匂宮のその後、さらには彼らの子孫達までもを六巻かけて描いた『雲隠六帖』。表現面の差異も、一読して明らかである。その隔たりがあまりに大きいのか、これまでこの二つを具体的に比べるということとはあまりなされてこなかったように思われる。しかし述べてきたとおり『源氏』の〈続き〉を描いた希有な試みであることを思えば、この二つを比べて中世における『源氏』の展開をたどることも、あながち無意味で

はあるまい。ここでは、二作品それぞれが設定した物語の枠組みを取り上げ、二つの差異と、そこから垣間見える中世における『源氏』享受の一端とに迫っていくこととしたい。

\* \* \*

二作品はともに、自らが『源氏』といかなる関係にあるかを語る、枠組みを設定している。『山路の露』の序、『雲隠六帖』の識語がそれである。作品のはじめと終わり、置かれた場所は異なれども、『源氏』の登場人物たちのその後を描いた物語の外側に、新たな人物を配し、その人物によって自らと『源氏』との関係を証する、という点で一致している。それぞれどのような人物を配したのか、『源氏』と己がどのような関係にあると主張しているのか、以下具体的に見てみたい。

### ■『山路の露』<sup>\*)</sup>

これは、かの光源氏の御末の薫大將ときこえし御あたりのことなれば、その続きめいたるこそいとかたはらいたうつつましけれど、ゆめゆめさには侍らず、ただかの小野の里人に尋ねあひたりし有り様・こなたかなたの御けしきくはしう見ける人の、夢のやうなる御仲のあはれに忍びがたくおほえけるままに、何となく筆のすさみに書き置き侍る。その人心にもさこそ人には漏らさざりけんを、かりそめなる旅の空にて主さへはかなくなりければ、「あだなる人のその行く末を弔はん」とて、藻塩草かきあつめけるそぞろ言ども皆えり出でて経の紙に漉かせけるついでに、これを見つけ、何の聞きどころある節もなけ

れども、「果ていかならん」と思ひわたる人の行方なりけり」と見るばかりのせめてをかしさに、残し置きけるにやあらん。

『山路の露』は、物語冒頭において、まず『源氏』との関わりを説明する。これから始めるお話は、『源氏』の「続き」などでは決してない、薫と浮舟のその後を「くはしう見ける人」がその様子を書き留めた、ただそれだけのことなのだ。

ごく短いものであるが、ここから、『山路の露』の生成と伝来に関わった三人の存在が知られる。Ⅰ薫たちの様子を「くはしう見ける人」、Ⅱその人の書き置きを「残し置きける」人、そしてⅢ書き置きを読みこれまでの事情を語る人、という三者である。

ここで重要なのは、この三人が薫と同じ時間・空間を生きていたという点であろう。それは、Ⅰが薫と浮舟の様子を「くはしう見」たと述べているだけでなく、Ⅲの語り手自身が「薫大將ときこえし」(＝薫大將と申し上げたお方)と語っていることから明らかである。『山路の露』にとって『源氏』は、ごく身近な過去の事実なのである。と同時に、〈『源氏』の「続き」ではない〉と明言することから、『源氏』は、ひとまとまりの存在として、『山路の露』に對置されていると了解されよう。まとまって語られるべき過去の事実の集積体、それが『源氏』であり、『山路の露』は別物なのだ、Ⅲ語り手がまずはじめに証言するのである。

### ■『雲隠六帖』

『雲隠六帖』の場合は現存する本文に問題があり、いささか厄介である。詳しくはかつて考察を加えたことがある<sup>\*)</sup>ため概要のみを記せば、次のとおりである。

まず版本の八橋巻末には、

尚侍の君

ゆくすゑをふみし人のころよりもとのみちをもおもひとりぬる

という形で、六巻の物語内容とは無関係な「尚侍の君」による、和歌一首が付載されている<sup>\*)</sup>。これに対し写本類には、上記の和歌が見えないかわりに、六巻の末尾に次のような識語が見える。

『源氏物語』六十帖のうち五十四



帖は、世間にあまねく流布す。この六帖は、源氏かくれ給ふこと、その上、仏法の奥義をこめたる巻々なるによりて、禁中に深く秘し給ふゆゑに、世上にもらし給はず。ここに尚侍の君とて当代ならびなき歌人いまそかりけり。御門の御心ざしも深かりしゆゑに、この巻々にいたるまでことごとく歌道の奥義をゆるし給ふ。

しかれども、ことの違ひ目ありて、天文の初めの頃はひ、肥前高来郡へ流され給ふ。都御出でるとき、この六帖をひそかに身にたづさへ持ちくだり給ふを、ねんごろに望みをつくし、写し侍り。後に見む人、これを重んずべし。秘すべし秘すべし。<sup>6</sup>

ここにも「尚侍の君」が登場しており、彼女が大変に優れた歌詠みであったこと、歌道の奥義の一環としてこの六巻の物語を御門から許されたことが記されている。この尚侍の素性を勘案すれば、彼女は版本の八橋巻末の詠者と同一人であり、物語の披見を許された際に和歌を詠じた、という事情が本来書かれていたと推測することができよう。それが、本文の伝流に伴って、和歌(= 版本八橋巻末)と詠歌事情の説明(= 写本類識語)とに分かれて伝わったものと思ひ。写本類の識語後半部、尚侍の流罪とそれに伴う本文の流出は、おそらく後から付加されたものであろう。つまり「雲隠六帖」は本来、六巻の末尾に、i 優れた歌詠みである尚侍と、ii 彼女に物語披見を許した御門の存在を記していたと考えられるのである。といっても、史実としてこの尚侍に比定しうる人物は見あたらず、物語の外枠として創作されたものと見るべきであろう。

「雲隠六帖」は、六巻の物語をまず示した上で、識語という形をもって己と「源氏」との関わりを説明する。今は六巻が独立して伝わっているけれども、これは本来「源氏」の一部なのだ、と主張するのである。このように、〈世に流布する五十四帖とともに作られたものだ〉とする以上、当然ながらその証言者は、実際に薫たちの様子を見聞した人物ではありえない。かつて作られたものとしてある六巻をありがた

くも披見することができた、享受者の立場から、その正当性を証言することになるのである。

\* \* \*

『山路の露』と『雲隠六帖』はともに、己の語る内容が確かに真実なのだという、その証明のために物語の枠組みを設定した。薫と浮舟の様子を〈実見した〉、あるいは、「源氏」五十四帖と〈本来ひとまとまりであった〉、と語ることによって、その内容を保証したのである。同じように「源氏」の〈続き〉を企図しながらそれぞれ異なる証言方法を採用したわけであるが、それはとりもなおさず、「源氏」に対する両作品のスタンスの違いに他ならない。

『山路の露』にとって「源氏」は、あくまでそれ自体で完結した存在であった。であるがゆえに、「源氏」と別物である己の信憑性を訴えるには、薫や浮舟と同じ時空を生きた人を必要とした。そしてその人物に、これから語る内容は真実である、けれどもしかし、「源氏」の「続き」などではない、伝承されるべき存在としての「源氏」とは決してひとまとまりになりえないのだ、と物語冒頭において宣言させる必要があったのである。

これに対し「雲隠六帖」にとっての「源氏」は、五十四帖では未完であり、六十帖そろってこそそのものであった。それゆえ、これこそが秘匿されてきた「源氏」の一部である、と享受者に証言させるという手段に出たのである。その証言の場が物語末尾であるのも、このスタンスと密接に関わっている。「雲隠六帖」の冒頭は、

かくて正月の御心おきてなど、れいよりもいと細かにのたまひおきてければ、人々もたのもしう見たてまつるに、朔日寅ひとつといふに……

と、「源氏」幻巻末尾で「朔日のほどのこと、常よりことなるべくとおきてさせたまふ。」と語られたのをそのまま引き承ける形をとっている。長篇の中途の巻頭でまゝ行われる<sup>7</sup>方法を用い、いかにも「源氏」の一卷としてある風を装うのである。その前に己の正当性を主張するような文言を置いてしまつて興ざめであろう。「源氏」六十巻の一部として、内容・表現ともにその幕

開けから「源氏」に直結させ、そのまま六巻すべてを語り終えた上で、いかにも今それを読み終えたという体で事情を説明させることにしたのである。

両作品のこのようなスタンスの違いは、物語内容にもよくあらわれている。

「源氏」がそれ自体で、すなわち夢浮橋巻で、完結したものと捉える『山路の露』は、確かに〈その後〉を語っているけれども、その内容は「源氏」の結末を大きく踏み越えるものではない。たとえ薫や浮舟母が直接に説得したとしても浮舟が還俗することはない、と夢浮橋巻末における浮舟の仏道への姿勢を再確認するととどまる。だからこそ、登場人物も、「源氏」にすでに登場した人々のみを基本とし、わずかに薫の御子誕生を予感させるにすぎない。ゆえに序における証言者三人の異質性も際だつわけであるが、そういった異質性以上に、「源氏」に対するスタンスと己の真実味とともに宣言する、その重みのほうを優先したのであろう。

そして「雲隠六帖」は、六十巻の「源氏」を完成すること、すなわち己が〈六巻〉の物語たることを何よりも重んじた。八橋巻のようにごく短くてもよい、ともかくも六巻に分けた物語を求めたのである。それゆえ、「雲隠」の名にふさわしい光源氏の入滅を描いた後は、自由に〈その後〉を描いていく。いとも簡単に浮舟を還俗させるし、新たな登場人物を生み出すことも厭わない。

「源氏」の〈続き〉を書くという点で、二作品は確かに共通している。しかし、そもそも「源氏」とは何であるのか、その把握において「山路の露」と「雲隠六帖」の間には大きな相違があった。夢浮橋巻で完結したものと考える『山路の露』と、五十四巻では未完だと捉える「雲隠六帖」。その出発点の相違が、物語内容、そして物語の枠組みの差異を生み出すことになったのである。

\* \* \*

物語内容そのものとは無関係な地点に証言者を設定した「雲隠六帖」は、その方法ゆえに、さらなる展開の可能性を秘めていた。すなわち、〈六巻の物語伝授を許された〉と語る証言者その人から



この本を借覧した」という、新たな伝承が生まれる可能性である。その事例のひとつが、「肥前高来郡」における享受であった。

写本類の識語には、先に引用したとおり、尚侍への物語伝授に続いて、彼女が「肥前高来郡」に左遷されてきたこと、そこで彼女からこの物語を借覧したことが記されている。なぜこのように「肥前高来郡」というきわめて具体的で、しかし物語類では一般に言及されることのないマイナーな地名がここで登場するのか。それは、この『雲隠六帖』という作品を手にした、現実の享受者に結びつくものであった。

『雲隠六帖』現存伝本の一部には、「右有馬越中入道徳圓御本ヲ以て書写者也 元和四年二月三日」との奥書が見える。有馬氏に仕えた徳円なる人物が『雲隠六帖』を所持しており、それを元和四年に転写したのだという。実はこの徳円は、まさに肥前国高来郡に住していたことが、家系図その他の資料によって判明するのである<sup>\*8</sup>。

実際には、そもそも尚侍が架空の存在であることから、流罪となって肥前高来郡に來た彼女から徳円が『雲隠六帖』を借覧したということは、ありえない。しかし物語がその創作の段階で享受者—それも秘伝の書を許されたという享受者—の存在を巻末に設定したとき、現実世界の享受者が、自らと物語に記してある享受者とを結びつけようと試みる可能性もまた生じたといつてよいだろう。肥前国高来郡の徳円は、その展開の一例にすぎない。出雲国松江に住まう何某、あるいは安芸国西条の某氏がそれを試みることも十分にありえたわけである。

薫と同じ時代を生きたという証言者を物語冒頭に設定した『山路の露』と違い、物語巻末において享受者に証言を委ねた『雲隠六帖』では、語り終えられたその時から、さらなる〈続き〉へと扉が開かれていたのである。

\*1『狭衣物語』は、『源氏』正編を〈過去の事実〉としてとらえ、もう一つの宇治十帖ともいべき物語として創作されたことが、後藤康文氏「もうひとりの薫—『狭衣物語』試論—」（『語文研究』第68号〈平1・12〉）によって論じられている。これも一種の『源氏』の〈続き〉であり非常に興味深い。『源氏』の登場人物達を実際に動かしたものでなく他の三作品とは位相を異にしているため、ここでは触れない。

\*2加藤昌嘉氏「甦る光源氏一名と実体—」（『人物で読む源氏物語 光源氏I』平17・勉誠出版）。『源氏最要抄』に見えるような、新たな場面や和歌を挿入した梗概書のあり方も、一脈相通ずるところがあろう。なお、加藤氏は近世期に作り出された〈続き〉の数々にも言及しておられる。

\*3『山路の露』の引用は慶安本「絵入源氏物語」により、私に表記を改めた。序の解釈と意義については、先に述べたことがある（「『山路の露』の〈序〉について—語り手の位置付けを中心に—」（『国文学研究資料館平成18年度研究成果報告『物語の生成と受容②』平19・2））。論の都合上、旧稿と一部内容が重複することをお断りしておく。

\*4拙稿①「『雲隠六帖』伝本二系統の関わりについて—識語を視点として—」（『国語と国文学』第82巻7号 平17・7）、拙稿②「別本『雲隠六帖』の伝流と享受—新出蓬左文庫寄託本の紹介を兼ねて—」（『国語国文』第76巻8号 平19・8）

\*5版本にはさらにこの後に、康平元年ならびに元応元年の偽奥書が存するが、別の時期に付されたものと思いたい。ここでは触れない。

\*6『雲隠六帖』の引用は、版本＝上方版、写本類＝愛知県立大学附属図書館蔵本により、私に表記を改めた。

\*7前掲\*2加藤氏論文

\*8前掲\*4拙稿②



『山路の露』（当館蔵）



## 第1回日本古典文学学術賞受賞者から

## 今様のもう一つの歴史

沖本幸子

(青山学院大学准教授)

「今様」と言って、すぐに平安末期の流行歌だと気づいてくれる人はとても少ない。たまに「知ってる!」と言ってもらえたかと思うと、「音楽の時間に聴きましたよ。黒田節のルーツになったものですよね?」と言われたりする。「それは『越天楽今様』というもので、平安時代の今様とは別物なんです。」そう言う、「では、平安時代の今様って一体どんな歌だったのですか?」と必ず聞かれる。

歌詞は後白河院が編集した『梁塵秘抄』などから知ることができるが、減じた芸能の悲しさでメロディはよくわからない。ただ一つ言えることは、流行が去ってしまった後も、今様はその時代時代にさまざまなリズムやメロディに乗り、新しい芸能として甦り、興じられ続けてきたということである。

たとえば、鎌倉・室町時代には、今様は「乱拍子」というリズムに乗って再登場した。主な舞台は寺院の延年。下級僧侶の衆徒たちが、鼓のリズムに乗って新しい芸能「乱拍子」の「乱舞」を豪快に舞った<sup>\*1</sup>。室町時代に潤色された『是害房絵』に、唐の天狗是害房の送別の酒宴で、日羅房が延年の舞を舞う場面が描かれているので見てみよう。まずは、周りの天狗たちが鼓を打ち、笏拍子を打って、和歌形式の歌を用いて次のように囃し立てる。

いやそよや 双葉より老ひの齢を思ふにも 今日千歳の初めなりけりやりことと

これに対して日羅房は、

諸法実相と観ずれば 峯の魔界も仏界なり 万法一如と説く時は 谷の鬼神も礼心なり<sup>\*2</sup>

と、今様形式の歌詞を天狗らしく「魔界」や「鬼神」の歌にして舞うのである。和歌で囃して今様形式の歌で舞う。絵巻物を見ると足を大きく上げて舞っているが、足拍子を踏み込んでいくことも「乱拍子」芸の特徴だった。メロディアスで女性芸能者の澄み登るような美声で歌われた歌謡「今様」から<sup>\*3</sup>、緊迫したリズムに乗って足を踏み込みながら舞う男たちの勇壮な「乱拍子」の「乱舞」へ、今様は新た

な芸能へと引き継がれ変貌を遂げたのだ。

さらに、15世紀になると<sup>\*4</sup>、同じ延年の「乱拍子」の中から今度は稚児の「相乱拍子」という芸能が生み出されていく。「風流」の後などに置かれ、しばしば崑崙山や万歳山といった山の造り物の中から二人の稚児が飛び出して舞った<sup>\*5</sup>。「舞催」と呼ばれる司会・進行役の遊僧<sup>\*6</sup>が、時に扇で切箔を舞い散らす中<sup>\*7</sup>、稚児たちは、

花の色々春咲くは 岸の青柳窓の梅 桜山吹岩躑躅 夏にかかれる藤の花

や、

長生殿の裏には 千年の春秋とどめたり 不老門の前には 年は行ども老ひもせず<sup>\*8</sup>

といった今様の歌詞を、鼓の乱拍子のリズムに乗せて歌いながら舞ったのだ。ここで思い出されるのが、毛越寺の延年で二人の稚児が舞う「唐拍子」で、

切利の都には 仏の御名をば知らすなり りりやりやりやり 五台山には文殊こそ 六字に華をば散らすなり りりやりやりやり<sup>\*9</sup>

という『梁塵秘抄』205番歌に似た今様形式の歌が歌われていることだ。この舞は、慈覚大師入唐の際に清涼山の麓に出現した二人の童子の舞を移したものと伝えていて、「相乱拍子」がしばしば崑崙山や万歳山などと関わって舞われていたことも重なってくる。さらに、菅江真澄は「かすむ駒形」に、その舞姿が「兎跳ね」と言われていたことを記録しており、足拍子を踏みながら舞う乱拍子が、稚児舞として昇華される中で「兎跳ね」になった可能性もうかがえよう。

衆徒たちの「乱拍子」も稚児たちの「相乱拍子」も、歌詞だけ見れば今様だが、ここではもはや「今様」ではない。しかも、同じ乱拍子のリズムに乗りながら、そして、同じ今様形式の歌詞を用いながら、一方は成人の男たちの豪快な乱舞として、もう一方は稚児二人の可憐で美しい舞「相乱拍子」として見事な対照を見せている。

『梁塵秘抄』の編者後白河院は、「声

技の悲しきことは、我が身隠れぬるのち、とどまることのなきなり」<sup>\*10</sup>と記し、今様の「声技」をなんとか後世に伝えようとした。残念ながら院の愛した今様のメロディは伝わらなかったが、院の意図を遙かに越えて、何百年もの間、今様は形を変えながら生き続けていった。「乱拍子」「相乱拍子」、そして、今回取り上げる紙幅はないが、近代日本の洋楽受容とも向き合いながら歌われた「越天楽今様」など、それぞれに新たなリズム、メロディ、楽器と共に興じられ、新しい芸能としての命を得て来たのである。後白河院の今様ではない、もう一つの今様の歴史が、ここにある。

\*1 沖本幸子「衆徒の舞—延年の乱拍子をめぐって」(『芸能史研究』181号、2008年4月)

\*2 梅津家蔵松本龟丘模本(『新修日本絵巻物全集』27)による。

\*3 沖本幸子「後白河院と今様の声」(『今様の時代—変容する宮廷芸能』東京大学出版会、2006年)

\*4 管見に及んだ限りでは、『室町殿御翫延年等日記』『満濟准后日記』永享元年(1429)9月22日の興福寺維摩会の記録が最も早い例である。

\*5 たとえば、\*4の記録では風流「崑崙山」で、また、『新撰長祿寛正記』『藤涼軒日録』に載る寛正6年(1465)9月21日興福寺維摩会の延年では風流「漢皇帝万歳山御覧之所」で、それぞれ二人の稚児が山から飛び出して舞っている。

\*6 松尾恒一「舞催—延年の道化—考」(『延年の芸能史的研究』岩田書院、1997年)に詳しい。

\*7 「相乱拍子舞ノ内舞催兩人出両方ヨリ切箔ヲ持扇ニテ蒔之」とある。(『大乘院新御門主隆遍維摩会御遂行仁付延年日記』『日本庶民文化史料集成』2)

\*8 『延年日記』『相乱拍子』(『日本庶民文化史料集成』2)による。

\*9 「平泉毛越寺延年」[本田安次著作集]15(錦正社)による。

\*10 「梁塵秘抄口伝集」10(新編日本古典文学全集)による。



## 第1回日本古典文学学術賞受賞者から

## 怨霊後醍醐の苦患

北村昌幸

(関西学院大学准教授)

国立歴史民俗博物館所蔵の『太平記絵巻』巻十一には、怨霊となった後醍醐天皇が天下騒乱の企てについて指図する場面が描かれている。右手に剣を握りしめ、口から火を吐くその姿は、『太平記』巻三十四「吉野の御廟神霊の事付けたり諸国の軍勢京都に還る事」の記述を忠実に絵画化したものである。吐き出された炎の先が黒煙となって、うねりながら空に上っていくさまも、『太平記』の本文そのままであり、総じて恐ろしげな姿が演出されているように映る。

だが、本来この炎と黒煙とは、怨敵を威嚇するためのものではなかった。『太平記』は「まことに苦しげなる御息をつがせたまふ度ごとに、御口より焰はつと燃え出でて、黒煙天に立ち上る」と記している。同じことは巻二十五に登場する怨霊たちにも当てはまるだろう。天狗の姿と化した峰僧正春雅らも、「頭より黒煙燃え出でて、悶絶躰地する事半時はかりあつて」回復したあと、「苦しげなる息をついて」ようやく天下騒乱の企てを語り始めたとされている。目撃者いわく、「これなんめり、天狗道の苦患に、熱鉄のまろかしを日に三度呑むなる事は」という様子であった。つまり、怨霊たちから発せられる炎や黒煙とは、じつは苦患に伴う余剰物だったわけである。

この「天狗道の苦患」については『比良山古人霊託』にも説かれているが、おそらくは『往生要集』の地獄の描写を前提にしていると思われる。『往生要集』によれば、口をこじ開けられた亡者たちは、そこに灼熱の鉄丸を押し込まれたり、あるいは、溶けた銅を流し込まれたりするという。承久本『北野天神縁起』の六道絵には、まさにその凄惨な場面が描かれている。熱く焼けただれた彼らの咽喉は、結果的に炎を噴出するものとして理解されるに至ったのではないだろうか。

もとより『太平記』は後醍醐天皇の墮地獄を明記しておらず、巻二十三「大森彦七が事」には「先朝は元來摩訶首羅王の所変にておはすれば、今還つて欲

界の六天に御座あり」という説が見えることから、前述の「苦しげなる御息」をただちに地獄の苦患と結びつけるべきではないのかもしれない。だが作中の巻二十六には(伝本によっては巻三十五にも)、後醍醐と縁の深い醍醐天皇の墮地獄説話が取り込まれている。そのことが影響している可能性は十分にあると思う。というのも、いま問題にしている巻三十四の怨霊出現記事において、後醍醐が最後に言い添える「さらば年号の変はらぬ先に、疾く疾く退治せよ」という言葉は、『北野天神縁起』の公忠蘇生譚(延長改元譚)で冥官がいう「延喜の帝こそすこぶる荒涼なれ。もし改元もあらばいかか」を踏まえていると見られるからである。太平記作者がこの場面で公忠蘇生譚を想起していたのであれば、醍醐天皇の墮地獄を語る日藏蘇生譚もまた、天神縁起の一部を構成するものとして、当然念頭にあったはずである。二人の天皇は巻十二において巧みに類比されているが、巻三十四の苦患の描写にもそれが揺曳しているのではないだろうか。

ところで、怨霊が天下を乱すという歴史認識は、『太平記』以前の文献にもたびたび記されてきた。筆頭に挙げられるのは崇徳院の例だろう。『愚管抄』は法住寺合戦をその怨霊あるいは天狗の所為と捉えている。また、『源平盛衰記』巻十二における平教盛の夢見記事も興味深い。崇徳院が生きたまま天狗の姿になったとする『保元物語』の記述を膨らませ、恐ろしげな外見をさらに強調したものとなっているのである。現世の人々に祟りをなす存在である以上、そうした叙述方法がとられるのは自然のなりゆきだったに相違ない。怨霊とはひたすらに恐ろしいものでなければならなかった。だが、それならば、『太平記』の記事をどう評価すればよいのか。怨霊が苦患にさいなまれる姿や、改元を危惧して事を急ぐ姿は、まるで自らの弱点をさらけ出しているようなものである。なぜこのような記述が組み込まれることになったのか、考えてみる必要がある

そうだ。

蓋し、怨霊の策動を語る巻三十四の記事は、裏を返せば、恐るべき対象であるはずの怨霊が、じつは六道世界の枠に縛られながら神仏に膝を屈する存在であること、つまり、絶対的な力を有してはいない存在だということを、あらためて浮かび上がらせるように思われる。すでに『平家物語』の延慶本にも、ある人の夢見記事として、勤行中の後白河院御所を襲うのを断念する崇徳院怨霊の話が語られていた。『太平記』はさらに一歩進んで、怨霊自身の弱さを明確に打ち出すことにより、ついにこれを相対化してしまったわけである。何事も多角的に捉えようとする太平記作者の手にかかれば、怨霊さえも二つの顔を持たされてしまうのかもしれない。そうした微妙な筆致をここでは感じ取っておきたいと思う。



## 第32回国際日本文学研究集会「物語の過去と未来」

平成20年10月11日(土)～12日(日)、第32回国際日本文学研究集会は国文学研究資料館で開催されました。二日間にわたった研究集会では、『源氏物語』の成立千年紀を因んで設定した「世界文学の中の日本文学—物語の過去と未来—」というテーマをめぐって、国内外の応募から選出された13名の研究発表、3名のポスターセッション発表の合計16名の発表とプリンストン大学の岡田・Richard・英樹教授の公開講演が行われました。研究発表者のうち10人は外国籍の大学教員及び大学院生であり、海外及び国内在住の12ヶ国38人の外国研究者を含む133人が参加しました。中国・朝鮮半島・ベトナム・ヨーロッパなどのさまざまな視座からの日本文学へのアプローチは、広い視野から探る日本文学研究の今後のあるべき姿を示し、参加者に大きな刺激を与えました。また、直衣着付実演・館長ギャラリートークなどのイベントも行われ、会場は大いに盛り上がりしました。

平成21年の第33回国際日本文学研究集会は4月下旬に研究発表を募集し、11月中旬に開催される予定です。詳しいことは来年4月に当館のホームページを御覧下さい。



当日の会場風景



講演するStina Jelbring氏(ストックホルム大学助手)

## 機構シンポジウム「源氏物語の魅力」

去る10月13日(月曜日・祝日)の午後、有楽町の朝日ホールにて人間文化研究機構主催の国際シンポジウムが開催されました。

当日は、石上英一人間文化研究機構理事の進行により、金田章裕人間文化研究機構長の挨拶の後、まず、ハルオ・シラネ氏(コロンビア大学教授)、カレル・フィアラ氏(福井県立大学教授)、平野啓子氏(大阪芸術大学教授・語部)、竹西寛子氏(作家)の多彩な講師により、それぞれ「源氏物語の魅力」について基調講演をいただき、その後、休憩を挟んで、伊井春樹国文学研究資料館長の司会で、竹西氏を除いた講師の3名に、スティーブン・ネルソン氏(法政大学教授)、ツベタナ・クリステワ氏(国際基督教大学教授)を加えて「源氏物語の世界を語る」と題して国際色豊かなメンバーによるシンポジウムが行われました。

今年が源氏物語の千年紀を記念しての企画でしたが、国外の研究者から源氏物語が世界的に高い評価を受けていることの報告がなされ、また、平野氏の美しい朗読や竹西氏の作家から見た源氏物語論などもあって約500人の聴衆は熱心に耳を傾け、しばし源氏物語の世界に浸っていました。



講演する竹西寛子氏



シンポジウムのパネラー各氏



## 源氏物語一千年紀 記念切手記念講演会

10月6日(月)に開催された本講演会は、「源氏物語一千年紀」切手のシートデザインに、当館の『源氏物語団扇画帖』が選ばれたことを記念して行われたものです。

講演会に先立ち、郵便事業株式会社より伊井春樹館長に初刷り切手シートが贈呈され、華やかな雰囲気の中で講演会が始まりました。初めにNHK番組キャスター、加賀美幸子さんから『源氏物語』若紫・御法巻の朗読とご講演を賜りましたが、加賀美さんは物語を耳で味わう大切さを説かれ、深みのある朗読に約200名の聴衆は魅了されました。続いて対談「源氏物語トーク」では、加賀美さんと伊井館長とが「源氏物語」の魅力を語り合いました。散文と和歌が混在する文章の美しさ、紫式部の人物像など話題は尽きませんでした。物語の内容とともに、原文の素晴らしさや日本語の響きを後世に伝えたいという結びには多くの方が頷いて下さるなど、終始、熱心で和やかな講演会となりました。



講演する加賀美幸子氏



伊井館長と加賀美氏の対談

## 連続講演「千年紀の源氏物語」

昨年(平成20年)が源氏物語一千年紀であったことから、それを記念し、平成20年9月30日(火)、10月14日(火)、10月28日(火)、11月11日(火)、11月18日(火)の5回にわたり、室伏信助先生(跡見学園女子大学名誉教授)を講師に迎え、「千年紀の源氏物語」と題し、連続講演を行いました。

会場には、毎回約100名の聴講者が来館し、源氏物語に関して多岐にわたる講演が行われ、聴講者からは、「源氏物語と他の物語のつながり、源氏物語の奥深さ等を認識させられて、興味を持って読み進めることが出来るようになった。」等の感想が寄せられました。

### 【日程】

#### ■第1回 9月30日

「幻想から理想へ ―源氏物語大島本の本姿―」

#### ■第2回 10月14日

「人なくてつれづれなれば」― 一本を見つめるということ ―」

#### ■第3回 10月28日

「竹取物語からうつほ物語へ ―源氏物語の承けたもの〈その一〉―」

#### ■第4回 11月11日

「伊勢物語と在五が物語 ―源氏物語の承けたもの〈その二〉―」

#### ■第5回 11月18日

「紫式部日記という物語」



講演する室伏先生



## 特別展「源氏物語 千年のかがやき」

当館では、日本経済新聞社との共同主催で10月4日(土)から10月31日(金)の期間、立川移転記念特別展「源氏物語 千年のかがやき」を開催しました。

本展示では、当館の基幹研究「『源氏物語』再生のための原典資料研究」(研究代表者:伊井 春樹 研究期間:平成19年度~20年度)の成果を基に、『源氏物語』の名が初めて文献に現れる西暦1008年(『紫式部日記』寛弘5年11月1日)から千年目に当たる2008年(平成20年)を記念し、この千年間、『源氏物語』がどのような形で読み継がれて来たのかを、画帖・絵巻・写本・注釈書・翻訳書などを通して、来場の方々にご覧頂きました。

来場者は4,069名であり、また図録の販売が994部と来場者の24%が購入しました。

また、アンケートでは、展示資料について「貴重なものが勢揃いで圧巻」、「解説が体系的でわかりやすい」等の好評な意見が寄せられました。



特別展「源氏物語 千年のかがやき」ポスター

## 新収資料紹介

### 光源氏系図 <ひかるげんじけいず>

[当館貴重書 99-123] 卷子本 1軸。縦34.0センチ、全長521.1センチ。紙継ぎ:21紙(各紙の寸法はまちまち)。

料紙:墨流し楮紙。表紙:茶色地花紋銀欄。後補。外題:「光源氏系図」。後補。

極め札:「二條家(為氏卿/源氏之系図)一卷(守村)」  
「源氏物語系図(二條家為氏卿)(牛庵)」

鎌倉時代末期ごろ写。

『源氏物語』の作中人物を系図に仕立てたもの。「源氏物語古系図(こけいず)」と称されるものの一伝本である。



のべ162名の作中人物を、略歴とともに掲載している(数え方によって増減あり)。序文・系図不載人物一覧・奥書などは、一切ない。「源氏物語古系図」としては、これまで、30数本の伝本が報告されているが(池田亀鑑『源氏物語大成研究資料篇』、常磐井和子『源氏物語古系図の研究』等参照)、本書は、新出の伝本であるのみならず、果守巻関係の人物を最も多く記載した最古の文献として、資料的価値がきわめて高い。

果守<すもり>巻は、現在、一写本さえ伝存していないが、「源氏物語古系図」の諸本や「源氏物語歌集」の古筆切の中に、断片的に伝えられている物語である。本書には、朱雀院の女四宮、源三位、頭中将、果守三位、内侍典侍、大納言、源三位の今の上、一品の宮の宣旨、帥中納言上、帥中納言、少将の上、蔵人弁の上、三河守、少納言、左京大夫、阿闍梨、左京尼といった人物名とその略歴が記されており、果守巻の復元資料としてきわめて貴重。

果守巻は、宇治十帖と重なる時期を扱った物語で、果守の三位という女君が、匂宮および薫と恋愛関係になり、薫の子を産むも、匂宮に言い寄られ、宇治山に身を隠す、という物語であったと推定される。



## 中間報告論文研究発表会

日本文学研究専攻では、12月3日に、「中間報告論文研究発表会」を実施しました。この行事は、安永前専攻長のご発案により専攻発足時から続いており、今年で6年(回)目になります。

発表を義務づけられているのは第1、2年次生で、1年間に蓄積した成果の報告を受けて、教員・他の院生と活発な質疑応答が交わされ、指導教員からの講評が行われます。その結果は、年明けに「中間報告論文」として提出され、厳正な審査を経て、第3年次以降にまとめられる博士論文の一部となり、また博論作成のための大事な糧となっていきます。この他に、研究生として専攻に在籍する人が希望して発表に参加した年もあります。

今回は学生4名(2年次生3名・1年次生1名)が、発表時間40分・質疑20分の持ち時間で行いました。発表内容は、平安文学・中世近世の紀行文・近世和歌・明治前期の出版研究と様々です。4名とも留学生であったり社会人であったり、言葉に対する、あるいは時間の制約というハンディキャップを抱えているのですが、それぞれに力の籠もった内容で、次々に飛び出す厳しい質問も、全て発表者の日頃の努力を評価した上でのものでした。

特に、学生の読みの姿勢は十分に認めながら、それを学問的な場で公にする際の表現の仕方について懇切に指摘して下さいたある先生のご質問は、発表者ばかりでなく、取り組むジャンルは違っても、会場にいた学生たちにとって大いに参考になるものだったのではないかと思います。

発表会の後は立川駅近くの居酒屋に場所を移し、先輩院生が幹事となって、学生・教員打ち揃ってのコンパが行われました。発表者への慰労と励ましの場として、これもまた貴重な専攻内コミュニケーションのひとつになっています。



発表する張氏



会場風景



## 平成21年度干支展の開催

当館では、平成21年1月19日～2月13日の間、「今年の干支展～丑・牛・うっしー～」と題し、平成21年の干支の「丑」にちなみ、館が所蔵する「牛」に関する資料を展示します。どうぞ、ご来館ください。

新春を迎え、今年の干支展として「牛・丑」をテーマに展示を企画致しました。牛は古くから人々の生活と共に、家畜として、労働力として人々の暮らしに恩恵を与えてくれました。

牛にまつわる話はいろいろあります。食に関わる日本書紀の記事や、牽牛・織女に関わる万葉集の記事など、労働現場からロマンあふれる話までさまざまです。

牛は、闘牛のように力強い象徴でもあり、鼠のすばしっこさと対比されて鈍重の象徴でもあります。肉牛や乳牛はおいしさの象徴だとも言えるでしょうか。

今回の展示では、所蔵資料の中から「牛」のさまざまな姿を紹介します。文学作品や絵巻物、錦絵と記録史料に表現された牛たちをご覧いただき、牛に託された各時代のイメージをお楽しみ下さい。



## 今後の展示予定

研究展示	日本実業史博物館からのメッセージー洪沢栄一と算盤・敬三と広告ー ○会期:平成21年3月2日～27日 期間中 入場無料、開室時間:午前10時～午後4時半、土日休室
通常展示	和書のさまざまー書誌学入門ー ○会期:平成21年4月中旬～6月中旬 期間中 入場無料、開室時間:午前10時～午後4時半、土日休室
人間文化研究機構 連携展示	百鬼夜行の世界 ○会期:平成21年7月18日～8月30日
特別展示	江戸の長編読みものー読本・実録・人情本ー 平成21年10月開催予定
特別展示	物語の生成と受容 平成21年11月開催予定
特別展示	江戸の絵本と歌仙絵 平成22年1月開催予定

## ● 次号までの閲覧室の開室予定カレンダー

■青は休館日 ■黄色は土曜開館日

### 1月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

### 2月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28

### 3月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

**国文学研究資料館**

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成21年2月1日

編集 国文学研究資料館広報出版室

印刷所 三鈴印刷株式会社

©人間文化研究機構国文学研究資料館